



図6 T家 1番蔵

は発展して江戸時代後期を代表する大坂商人の一人となるが、土蔵は残念ながら先年取り壊された。

蔵が町並みのアクセントー帝塚山

近代になると、郊外電車などの交通機関の発達により、新しい郊外住宅地が開発されるようになる。住吉区でも、明治末期には高級住宅地として帝塚山などが開発された。郊外住宅地では、伝統的建築をもとにした新しい和風や洋風のオシャレな住宅が建てられ、住生活は洋風化するが、収納施設である土蔵は洋風化することなく、江戸時代と同様のものが建築された。

ここで土蔵の位置に注目してみよう。江戸時代の商家では、土蔵は広大な敷地の奥に建てられることが多く、近辺の商家もそれにならうことで、線状に土蔵が連なる防火帯が形成され、住宅を含む町全体の防火機能が向上した。しかし、この景観は表通りから見ることではできなかった。

それに対し、郊外住宅地では、敷地の大きさが制限されることから、表通りに面しても建築されるようになり（図7表



図7 表通りに面した土蔵

通りに面した土蔵)、洋風や和風住宅の家並みに加えて、伝統的な外観の土蔵が町並みを形成する要素として、景観に変化を与えるようになる。

以上、見てきたように、蔵は、元來は貴重な物品の収納・保管施設であったが、富の蓄積に伴うステータスシンボルとなった。そして、土蔵造りによる防火性・安全性などの向上により、保管施設としての重要性を一層増すとともに、近代には町並みに変化を与えるアクセントとしての機能も持つようになる。帝塚山の変化に富んだ町並みの形成に土蔵が果たした役割は大きいと思われる。

注

1) 現在は、写真と異なる復元がなされている。

住吉大社と高蔵・御文庫について

住吉大社権禰宜 小出英詞



住吉大社の四本宮を上空からのぞむ

はじめに

住吉大社は、住吉を象徴する反橋（太鼓橋）をはじめとして名所旧跡を数多く有しているが、なかでも文化財指定の建造物には、国宝本殿4棟、重要文化財14点、国登録文化財1点があり、このほかにも実に多種多様な建造物が境内各所に存在している。

建造物群をながめてみると、本殿は神社建築としては最古の様式を今に伝える存在で、それに附属する幣殿・渡殿は中世以降の特徴的な建築である。また、住吉舞楽を象徴する石舞台・東西楽所、そして神宮寺の遺構でもある旧護摩堂（招魂社）、和風迎賓館としての神館など多種多彩におよぶ。もちろんその中には貴重な“蔵”も含まれており、それもあわせて少し紹介してみよう。

住吉大社と職人

住吉大社の特徴として式年遷宮という伝統がある。これは一定の年数をもって神殿

を新造し神体を遷す制度で、近世以降は新造ではなく修復をほどこすようになったものの、この伝統ゆえに古代建築「住吉造」が受け継がれてきた。この造営には数々の用材が必要とされたが、それに関係した地名の伝説も数多く残る。

住吉区と住之江区にまたがる「粉浜」という地名について、一説には住吉大社造営のための材木を浜に引き上げた「木浜」に由来するという。また、粉浜に隣接する西成区玉出は旧名を「勝間」といい、かつてコツマ南瓜の産地として名が知られたが、この勝間の名も「木積（木妻）」であり、住吉大社造営の材木を積み上げたことに由来するという説もある。

それに関連して、戦前までは大海神社の北辺から住吉公園の北側をへて、住吉の浦に流れていた「材木川」と称する川筋（暗渠）があった。これも住吉大社造営のために堀削した水路の名残りであり、住吉浦よ